（岩倉紙芝居館古典館[http://hjueda.on.coocan.jp//koten/koten.htm](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm)　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、また、議論したことを、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。

1） 子曰學而時習之不亦説乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不慍不亦君子乎
zǐ yuē xué ér shí xí zhī bù yì yuè hū yǒu péng zì yuǎn fāng lái bù yì lè hū rén bù zhī ér bù yùn bù yì jūn zǐ hū
子の曰はく、學びて時に之を習ふ、また、説からずや。朋有りて遠方より來る、また、樂からずや。人知らずして慍くまず、また君子ならずや。

子曰は子の曰（のたま）はく。子とは先生、孔子は孔先生、先生が自ら自分の学習法をこう述べられた。時有錯誤とは、いつも誤りをしでかすこと（大修館書店中日大辞典、以下中日大辞典）。學而時習之は学べばいつも、それがわかるまで繰り返し習うこと。yuè 説はyuè 悦（よろこぶ）に同じ。やり続けていると、ふと、わかるときがある。そのときのこころの高鳴り！また、うれしからずや？
péng 朋は倗が正字、朋とは一対をなすもので、倗は賓主に供する樽酒を人が前後に担いでいる象形、この両樽を朋酒といい、朋友はその引伸の義（平凡社字統、以下字統）。朋の場合酒を酌み交わすことが想定されていようか。孔子は酒豪であり、いくら飲んでも乱れることはなかったという。本当かな？yǒu 友は「兄弟に友」というごとく、同族の友誼の情が原義とされる（字統）。樂はlèで、楽しいこと。yuèで、音楽、yàoは、文語で、楽しむ、愛好すること（中日大辞典）。孔子は定公13年56歳から哀公11年69歳まで14年間仕えるべき主君を求めて諸国を訪ね歩いている。実のところ、孔子を宰相として用いる君主はなく、君主がその気になっても時の宰相らが反対し、その来訪が歓迎されたとは思われない。孔子とて遠方からの朋友来たれば誰でも楽しかったわけではあるまい。両者の心にひびくものがなければどうして樂しかろう?互いに感ずるところあり、共鳴してこそ、また、たのしからずや？
yùn 慍（うらむ）は文語、器中のものが温められ熱気が充溢することを心情の上にうつして心に鬱積するところのある意（字統）。宰相として用いられず、最愛の弟子、顔回に死なれ、子路やわが子、伯魚にも先立たれた孔子は、天も自分を見放したのかと心に鬱々とするものがあった。さような哀しみ、学の悦や朋との樂を知ることなくして、対峙してくる相手に慍ずとは、いかなる対応をされたのか？
全篇を読み終えて、ここにもどれば、孔子の生涯が一瞬にして蘇ろう。

說は悦yuè（よろこぶ）に同じ。學の言爲る效（こう）なり。人の性は皆善。而して覺ることに先後有り。後覺の者は、必ず先覺のする所に效（なら）へば、乃ち以て善を明して其の初めに復（かへ）る可し。習は、鳥の數々（しばしば）飛ぶなり。之を學びて已（や）まざること、鳥の數々飛ぶが如し。說は、喜意なり。旣に學びて又時時之を習へば、則ち學ぶ所の者熟して、中心喜說し、其の進むこと自ら已むこと能はざる。程子（程頤、伊川、1033～1107）の曰く、習は重習なり。時復（ま）た思繹し、中（うち）に浹洽（しょうこう、あまねく行き渡る）すれば、則ち說ぶなり。又曰く、學者は將に以て之を行はん。時に之を習ふは、則ち學ぶ所の者我に在り、故に說。謝氏（謝良佐；顕道、1050～1103、程顥・程頤の門人、寿春上蔡「河南省」の出身）の曰く、時に習ふ者、時として習はざること無し。坐（ざ）するに尸（し）の如くするは、坐（すは）ふる時習ふなり。立つに齊（せい）するが如くするは、立つ時習ふなり。樂の音は洛lè。朋は同類なり。遠方より來れば、則ち近き者は知る可し。程子の曰く、善を以て人に及ぶ、信從する者衆し。故に樂しむ可き。又曰く、說は心に在り。樂は發散して外に在るを主とす。
慍yùnは紆yū問wènの反。慍は怒を含む意。君子は成德の名。尹氏（名は焞。1071～1142程伊川の高弟。）の曰く、學ぶは己に在り。知ると知らざる人に在り。何ぞ慍ることか之れ有らん、と。程子の曰く、人に及ぶを樂しむと雖も、是と見ずして悶（うれふ）ること無きは、乃ち所謂君子。愚謂へらく、人に及んで樂しむは、順にして易く、知られずして慍らざるは、逆にして難し。故に惟成德の者之を能くす。然れども德の成る所以は、亦學の正しく、習の熟し、說ぶこと深くして、已まざるに由るのみ。程子の曰く、樂しむは說ぶに由り而して後に得。樂しむに非ずば以て君子を語るに足らず。（緑字は朱熹注、語注は筆者）

學と時習に関する長い議論が有る。何晏(193?～249)は、「時とは学ばんとする者の時を以て誦習するなり。誦習するに時を以てし、学びて業を廃する無き（論語集解）。」とし、学ぶべきことを暗誦し、それをづっと続けることとし、皇侃（488～544）は、「学は覚なり悟なり。言ふは、先王の道を用ひ、人の情性を導きて自ら覚悟し、非を去り是を取り、君子の徳を積成せ使むるなり（義疏）。」とし、「時とは、凡そ学ぶに三時有り。一は是れ人身中に就きて時と為し、二は年中に就きて時と為し、三は日中に就きて時と為す（義疏）。」とした。程子は重習、思繹、浹洽、說を言ひ、「習とは禽の飛を習ふが如し。(論語精義・二程外書)」とし、謝氏が坐しても立っても、時とは四六時中であるとした。言ふべきことに新味を出すために、朱熹は「学之為言效也」とした。效とは「博学・慎思・審問・明排・篤行は皆な学效の事なり」(楊願録)」ともしており、善を明らかにして善に返るともしており、孟子の性善をもカバーした。

2）有子曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也君子務本本立而道生孝弟也者其爲仁之本與
yǒu zǐ yuē qí wéi rén yě xiào tì ér hào fàn shàng zhě xiǎn yǐ bù hào fàn shàng ér hǎo zuò luàn zhě wèi zhī yǒu yě jūn zǐ wù běn běn lì ér dào shēng xiào tì yě zhě qí wéi rén zhī běn yú
有子が曰く、其の人と爲りや孝弟にして上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すこと好まずして、亂を作すことを好む者は、未だこれ有らざる。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟は其れ仁を爲すの本か。

有子曰は有子が曰（いは）く。訓読では孔子以外は曰く。有子は孔子より43歳少（わか）く、姓は有、名は若。子と尊称でよばれるのは有子と曾子（曾参）。この二人の門人が論語を編纂したとされる。孝弟（こうてい）は親や兄によくつかえること。犯は、神威や君長をおそれず、その尊厳を冒すこと（字統）。作は人がなす、起こすこと全般に用いる。「兵（いくさ）、外に作（おこ）るを寇となし、内に作るを乱となす」（左伝：春秋左氏伝）といい、亂は内乱をさす。務本とは文語で根本に力をつくすこと。本（もと）とは爲仁であり、爲仁の本は孝弟という。
前段の凝縮された孔子の言葉の後に、何故かくのごとき有子の言葉が置かれたのか？

弟tì･好hàoは皆去聲。鮮xiǎnは上聲。下も同じ。有子は孔子の弟子、名は若。善く父母に事（つこうま）つるを孝とし、善く兄長に事つるを弟とす。上を犯すは、上に在る人を干犯（かんぱん、逆らひ犯す）するを謂ふ。鮮は少なり。亂を作（な）すは、則ち悖逆（はいぎゃく、もとりそむく）爭鬭の事を爲す。此れ言ふは、人能く孝弟なれば、則ち其の心和順して、上を犯すを好むこと少なし。必ず亂を作すを好まざる。與yúは平聲。務は力を專（もは）らにするなり。本は猶根のごとし。仁は愛の理、心の德なり。仁を爲すは、猶仁を行ふと曰うがごとし。與は疑辭、謙退して敢えて質（ただ）し言はざる。言ふは、君子は凡事、專ら力を根本に用ふ。根本旣に立たば、則ち其の道自ら生ず。上の文所謂（いはゆる）孝弟（こうてい）の若きは、乃ち是れ仁を爲す本。學者此を務むれば、則ち仁道此より生ず。程子の曰く、孝弟は順德なり。故に上を犯すを好まず。豈に復（ま）た理に逆ひ、常を亂るの事の有らんや。德、本有る、本立てば則ち其の道充大なり。孝弟家に行はれて後仁愛物に及ぶ。所謂親を親（しん）して民を仁する。故に仁を爲るは孝弟を以て本と為す。性を論ずれば則ち仁を以て孝弟の本とす。或ひと問ふ。孝弟は仁を爲るの本、此は是れ孝弟に由りて以て仁に至る可きや否や。曰く、非なり。仁を行ふは孝弟より始むを謂ふ。孝弟は是れ仁の一事。之を仁を行ふの本と謂ふは則ち可なり。是れ仁の本と謂ふは則ち不可なり。蓋し、仁は是れ性なり。孝弟は是れ用なり。性の中は只箇の仁義禮智の四つの者有るのみ。曷（なん）ぞ嘗て孝弟有り來らん。然るに仁は愛を主とし、愛は親を愛するより大なるは莫し。故に曰く、孝弟なる者は、其れ仁を爲すの本か。（緑字は朱熹注）

言ふは易く、行ふは難し。有子自身の行ひは孝弟であったのか？有子は、その本が立ち道を生んだのであろうか？このことがここで問はれている。

3）子曰巧言令色鮮矣仁
zǐ yuē qiǎo yán lìng sè xiǎn yǐ rén
子の曰はく、巧言令色、鮮ないかな仁。

巧言（こうげん）とは聞けば、如何にもおのずとそのように思われるようでありながら、真の姿を伝えていない言い回しである。令名とは評判の良いこと、令色（れいしょく）の色とは顔色のことで、いかにも評判のよさそうな、すずやかな顔つきの話し方となろうか。鮮はxiǎn（尟、尠の仮借）で少ない、xiānで新しい、味が良い義（中日大辞典）。少はshǎoで少ない義であるが小さいものを連ねてすくないという象形、言い回しや顔色を意識すれば鮮がいかにもぴったりする。論語では少shàoで若い義に用いられる。巧言令色とはいかにもそう聞こえ、顔つきからも納得するのであるが、仁がすくないという。前段の有子の言葉と態度がそれにあたる。
有若は有子と尊称されるほどの秀才であり、司馬遷の仲尼弟子列伝「有若」によれば、容貌も孔子に似ており、弟子達は孔子亡きあと、彼を立てて師とした。三年の喪に服した教団を再興し、維持するためであろうか、いかなる事情があったにせよこれが破綻する。いい年をして子供のない商瞿を孔子が斉に派遣するとき、母親が懸念したが、孔子は、子供はできるから大丈夫と送り出した。果たせるかな40歳にして5人の子持ちとなっていた。何故、孔子はこれを知っていたか？と弟子が有子に尋ねると、有子は応えられなかった。商瞿は魯の人で孔子より26歳少（わか）く、孔子から易を伝へられたというから、易に基づく予測であったと思われる。これをもって弟子達が師の座から有子をおろしたという。この話の出典は孟子の滕文公篇である＊。教団にとっても、有若にとっても大いなるguò 過（あやまち）であり、ここに、この孔子の言葉を配して戒めとしたのであろう。伯魚の子、原憲（子思：孔子の孫）の孫弟子が孟子である。
＊孟子、滕文公章句上四に、「昔し孔子沒し、三年の外、門人任を治めて將に歸る。入りて子貢に揖（ゆう）し、相嚮（むか）ひて哭し、皆聲を失ふ。然る後に歸へる。子貢反（かへ）りて、場に室を築き、獨り三年居（ま）す。然る後に歸へる。他日、子夏･子張･子游、有若聖人に似るを以て、孔子に事（つこうまつ）る所を以て之に事るを欲す。曾子に彊（し）ゆ。曾子の曰、不可。江漢以て之を濯（あら）ひ、秋陽以て之を暴（さら）す。皜皜乎として尙已すべからず。」（孔子は）長江、漢水で身を潔め、秋の強い陽に身を晒し（大変な辛酸を経験され）汚れがない、その潔白なさまは、有若に比すべくもない。

巧は好。令は善なり。其の言を好くし、其の色を善くし、外に飾を致し、努めて以て人を悦ばせば、則ち人欲肆（ほしいまま）にして、本心の德亡ぶ。聖人の辭迫切ならず。專ら言は鮮くして、則ち絶へて無きこと知る可し。學者の當に深く戒むべき所なり。○程子の曰く、巧言令色の仁に非ざるを知るは、則ち仁を知る。

4）曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎
zēng zǐ yuē wú rì sān xǐng wú shēn wèi rén móu ér bù zhōng hū yǔ péng yǒu jiāo ér bú xìn hū chuán bù xí hū
曾子の曰く、吾れ日に三つ吾が身を省る。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交はりて信ならざるか。習はざるを傳へしか。

曾子は曾参、南武城の人で、字（あざな）は子輿、孔子より46歳少い。よく孝道に通じ、魯の孔子の学園の長となり、その門下から原憲がでる。
人とは上（かみ）のこと、謀（はかる）とは、神意に謀ってのち、はじめて事を行うべきことをいうことが原義（字統）であり、忠とはそれを行うに敬（つつし）みて、心を尽くすこと求める。上に対して本心から思うことを申し上げたのか？不信とは疑いの心をもったまま信用しているかのごとく付き合うことを意味し、そういふ交はりをしていないか。不習とは、学んだものの習得できていないこと、そのまま弟子に傳へてはいないか。前段の有若に関連して、曾子のこの言葉と行動がとりあげられた。孟子の滕文公篇によれば、曾参は弟子達が有若を師とすることを不可とし、師の席を空白のままにしておくことを主張したという。巧言令色とは対極の言葉と行動がここにはある。

省は悉井の反xǐng。爲は去聲wèi（～のために）。傳は平聲chuán（伝へる孔子傳zhuàn）。○曾子は孔子の弟子、名は參、字は子輿。己を盡くす之れを忠と謂ひ、實を以てする之れを信と謂ふ。傳は之を師より受くるを謂ふ。習は之を己に熟すを謂ふ。曾子此の三つの者を以て、曰に其の身を省み、有れば則ち之を改め、無れば則ち勉を加ふ。其の自ら治むる誠切の此の如し、學を爲すの本を得ると謂ふ可し。而して三つの者の序は、則ち又忠信を以て傳習の本とする。○尹氏曰く、曾子、約のこと守ること、故に動くに必ず諸を身に求む。謝氏曰く、諸子の學は、皆聖人より出づ。其の後愈々遠くして、愈々其の眞を失ふ。獨り曾子の學、專はら心を内に用ゆ。故に之を傳へて弊無し。子思･孟子を觀て見る可し。惜しいかな、其の嘉言善行、盡く世に傳はざること。其の幸に存して未だ泯（ほろ）びざるは。學者、其れ心を盡さざる可きか。

5）子曰道千乘之國敬事而信節用而愛人使民以時
zǐ yuē dào qiān shèng zhī guó jìng shì ér xìn jié yòng ér ài rén shǐ mín yǐ shí
子の曰はく、千乘の國を道（をさ）むるに、事を敬みて信、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てす。

千乘（せんじょう）之國とは四頭立て戦車千台を有する国、覇者、晋が一回の戦闘に四千乘を投入していることからすれば、大国とはいえないが小国でもない。國の大事は、祀と戈にあり、とされる。祀とは祭祀、戈とは軍事であり、税に収斂される。道（みちびく）の古文の字形は首と寸、金文では辵と首と又、後の導dǎo の字にあたる。首（異なる族の首）を携えて道を行く、修祓（しゅうふつ）しながら進み導くことが道の初義（字統）。戦車千台を有する国の君主、諸侯に進言するに際しての心得を説いた。
事（祀と戈）をみだりに行ってはならない。祀ってはならぬものを祀る、攻めてはならぬものを攻める、これでは信は得られない。祀るべきを敬（つつし）みて祀り、攻めるべきを敬みて攻める。信なくば國立たず。節用而愛人は対となっており、節用とは増税や増役を招くような事業をみだりに行わぬことである。血税とは兵役のこと、信なき戦は愛人の反。四時とは四季の義で、使民以時とは、暦を管理し、民に正しく季を示し、その季に応じて農事を進めしむること。かく行えば、民の暮らしは富み、税収が増す。

道･乘は皆去聲。○道dàoは治むるなり。千乘shèngは諸侯の國、其の地、兵車千乘を出す可き者なり。敬は主一無適の謂（いひ）。事を敬して信は、其の事を敬して民に信あるなり。時は農隙（のうげき）の時を謂ふ。言ふは、國を治むるの要は、此の五つの者に在り。亦本を務むるの意なり。○程子の曰く、此の言至りて淺し。然るに當時の諸侯果たして能く此、亦以て其の國を治むるに足れり。聖人の言至りて近しと雖も、上下皆通ず。此の三言は、若し其の極を推せば、堯舜の治も亦此に過ぎず。常人の近きを言ふが若きは、則ち淺近のみ。楊氏の曰く、上敬せずんば則ち下慢（あなど）り、信あらずんば則ち下疑ふ。下慢りて疑へば、事立たず。事を敬して信ずるは、身を以て之に先んずるなり。易に曰く、節して以て度を制すれば、財を傷（やぶ）らず、民を害（そこな）はず。蓋し用を侈（おご）るは則ち財を傷（そこな）ふ。財を傷（やぶ）れば必ず民を害（そこなふ）に至る。故に民を愛するは必ず用を節することを先にす。然るに之を使ふに其の時を以てせざる、則ち本を力むる者自ら盡くすことを獲ず。人を愛するの心有りと雖も、人其の澤（たく）を被らず。然り此れ特に其の存する所を論ずるのみ。未だ政を爲すに及ばざる。苟も是の心無ければ、則ち政有りと雖も行はれず。胡氏の曰く、凡そ此の數（すう）けの者、又皆敬を以て主と爲す。愚謂ふ、五つの者反復相因りて、各々次第有り。讀者よろしく細かに之を推す宜（べ）し。
■主一無適　程頤は、仏教、道教に対して、心の修養法として、論語、憲問篇「己を修めるに敬を以てす」及び易経、坤卦文言伝の「君子は敬もって内を直し、義もって外を方す。敬義、立ちて徳、孤ならず」から、心を一つの事に集中させ他にそらさないこと（主一無適）、持敬を唱へた。

6）子曰弟子入則孝出則弟謹而信汎愛衆而親仁行有餘力則以學文
zǐ yuē dì zǐ rù zé xiào chū zé tì jǐn ér xìn fàn ài zhòng ér qīn rén xíng yǒu yú lì zé yǐ xué wén
子の曰はく、弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟（てい）、謹しみて信、汎く衆を愛して仁に親（ちか）づく。行ひて餘力有らば則ち以て文を學ぶ。

弟子（ていし）は子弟、弟子（でし）が門人、門弟のこと。今度は学ぶ者の心得を説いた。孟子、滕文公に「入則孝出則悌」とある。弟に悌順の意があり、その専字として悌がつくられた（字統）。家内では親に孝、外では目上に弟（心順にして行ひ篤きこと）。孝は礼記（らいき）、祭統に「孝なるものは畜（そう）なり。道に順（したが）ひて逆（さか）らはず。これをこれ畜（やしな）ふといふ。」説文解字（以下説文）に「善（よ）く父母に事（つか）ふる者なり。」左伝（春秋左氏伝）、文二年に、「孝は禮の始なり。」国語、周語に、「孝は文の本なり。」礼記、祭義に「衆の本經を孝といふ」と後に孝經にまとめられる。謹とは、畏（かしこ）み、畏み申す意（字統）。そこに信が生まれる。
父母や上に孝弟を尽くし、汎（ひろ）く、わけへだてなく人に奉仕し、仁（ある人）に親しむ心なくして、文（詩、書、易、樂、春秋等）を學びて如何？

弟子の弟は上聲dì。則弟の弟は去聲tì。○謹は、行(こう)之れ常有るなり。信は、言（げん）之れ實有るなり。汎は廣なり。衆は衆人を謂ふ。親は近なり。仁は仁者を謂ふ。餘力は、猶暇日と言ふがごとし。以は用なり。文は詩書六藝の文を謂ふ。○程子曰く、弟子の職は、力（つと）め餘り有れば則ち文を學ぶ。其の職を修めずして文を先にするは、己が爲の學に非ざるなり。尹氏の曰く、德行は本なり。文藝は末なり。其の本末を窮め、先後する所を知れば、以て德に入る可し。洪氏の曰く、未だ餘力有らずして文を學ぶは、則ち文其の質を滅す。餘力有りて文を學ばざるは、則ち質勝ちて野。愚謂ふ、力め行ひて文を學ばざれは、則ち以て聖賢の成法を考へ、事理の當然を而して行ふ所或は私意に出づ、但之を野に失するに非ざるを識ること無きのみ。

7）子夏曰賢賢易色事父母能竭其力事君能致其身與朋友交言而有信雖曰未學吾必謂之學矣
zǐ xià yuē xián xián yì sè shì fù mǔ néng jié qí lì shì jūn néng zhì qí shēn yǔ péng yǒu jiāo yán ér yǒu xìn suī yuē wèi xué wú bì wèi zhī xué yǐ
子夏が曰く、賢を賢とし色に易へ、父母に事（つこうまつり）て能く其の力を竭し、君に事て能く其の身を致し、朋友と交はるに言ひて信有らば、未だ學びずと曰へども、吾必ずやこれを學びたりと謂はん。

子夏は孔子より44歳少く、姓は卜、名は商。孔子の死後、魏の文候の顧問となる。また、「詩経」の注釈は子夏をへて伝はったとされる。孔子は音楽好きであるが、子夏は絵画を好む。賢賢易色はわからない。易と色の解釈が人により大いに異なる。賢人に事（つか）へる心得であろう。色は顔色、容色であるが、徳の色、心の色を想定し、賢者の（顔や心の）色に（自らの顔や心の色を）易（かえ）る、感化さるべしと解してみたい。易はカメレオンのごときもの、森羅万象の変転を説く。
その後は前段のことばを子夏流に解釈したとなろうか。竭（つく）すは、jìn 尽くすと同義であるが、jié lì 竭力は結力と同音。礼記、礼運に、「五行の動くや、迭（たが）ひして相竭（あひつく）すなり」とあり、親子が相互に竭すことが想定されていよう。致zhìの同音は治、秩、制、志があり、致は此れよりして彼に送致することであるが召致、坐致のように呼びつける意にも用いる。また、致仕、致政は職を辞し官を返すこと、致命は命を棄てる意（字統）。致身とは互いに致ることでもあるが、その身をすてる覚悟が含まれていよう。先生について學ばずとも學んできたのが孔子自身であった。

子夏は孔子の弟子、姓は卜、名は商。人の賢を賢として、其の色を好むの心に易へるに、善を好みて誠有るなり。致は猶委のごとし。其の身を委致するは、其の身有らざるを謂ふなり。四つの者は皆人倫の大なる者にて、之を行ふに必ず其の誠を盡す。學は是の如きを求むるのみ。故に子夏の言、能く是の如き人有らば、苟（いやしく）も生質の美に非ざれば、必ず其れ學を務むの至ならん。或は以て未だ嘗て學を爲さずと雖も、我は必ず之を已に學べりと謂はん。○游氏の曰く、三代の學は皆人倫を明らかにする所以なり。是の四つの者を能くすれば、則ち人倫に於て厚し。學の道爲る、何を以て此に加ふ。子夏、文學を以て名あり。而も其の言此の如し。則ち古人の謂う所の學を知る可し。故に學而の一篇は、大抵皆本を務むるに在り。吳氏曰く、子夏の言、其の意善し。然れども辭氣の閒、抑揚太だ過ぐ。其の流の弊、將に或は學を廢（す）つるに至るべし。必ず上の章の夫子の言の若くして、然る後弊無きとするなり。
■人の賢なるを賢として尊び、己が色を好むの心に易へ、以て善く好むの誠をなし、と注される。
■游氏（1077-1132）、儒門の出身、其の從兄名を為す、理學家游酢（1053-1123）。
■吳氏　不明

8）子曰君子不重則不威學則不固主忠信無友不如己者過則勿憚改
zǐ yuē jūn zǐ bú zhòng zé bù wēi xué zé bú gù zhǔ zhōng xìn wú yǒu bù rú jǐ zhě guò zé wù dàn gǎi
子の曰はく、君子重からざれば則ち威ならず、學ぶも則ち固からず。忠信を主とし、己に如ざる者を友とすること無かれ。過てば則ち改るに憚ること勿かれ。

君子の心得についてのべている。重 zhòng は衆でもある。君子は衆にどっしりと対するものであらねばならない。固（かたい）とは堅固にして久安、久しく持続すること。限度をこえると固陋、頑固となる（字統）。どっしりしていないと、威厳はなく、学んだことを永く安んじることもできない。主忠信、忠と信が対となる。相手の忠に対し信を以て応じる、相手の信に対して忠を以て応じる。これが通じぬ相手を友とすることはできない。しかし、できていると思い込んで、過ちを犯しているのが人である。気付かば、改むるに憚ることはない。

重は厚重、威は威嚴、固は堅固なり。外に輕き者は、必ず内に堅きこと能はず。故に厚重ならざれば、則ち威嚴無くして、學ぶ所も亦堅固ならざるなり。
人忠信ならざれば、則ち事（こと）、皆實無し。惡を爲すは則ち易く、善を爲すこと則ち難し。故に學者は必ず是を以て主とす。程子の曰く、人の道は唯忠信に在り。誠ならずんば則ち物無し。且出入に時無く、其の郷を知ること莫きは人の心なり。若し忠信無くば、豈復物有らんや。
無は毋に通ず。禁止の辭なり。友は仁を輔くる所以なり。己に如かざれば、則ち益無くして損有り。
勿も亦禁止の辭。憚は畏難なり。自ら治めて勇ならざれば、則ち惡日々に長ず。故に過有れば則ち當に速かに改めて、畏難して苟も安ず可からず。程子の曰く、學問の道は他無し。其の不善を知れば、則ち速かに改め以て善に從ふのみ。○程子の曰く、君子の自ら修むる道は、當に是の如くす。游氏の曰く、君子の道は、威重を以て質と爲し、學を以て之を成す。學の道は、必ず忠信を以て主とし、己に勝れる者を以て之を輔く。然れども或は過を改むるに吝なれば、則ち終に以て德に入ること無くして、賢者も亦未だ必ずしも告（かた）るに善道を以（す）るを樂（この）まず。故に過は改むるに憚ること勿きを以て終ふ。

9）曾子曰愼終追遠民德歸厚矣
zēng zǐ yuē shèn zhōng zhuī yuǎn mín dé guī hòu yǐ
曾子の曰く、終を愼しみて、遠を追へば、民の德、厚きに歸す。

君子の心得について、曾子が更に付け足した。終は糸の末端を結んで止めること、終結の意、すべての終わること。死とは、屍を意味する。人が死すや、その屍は草間に捨てられ（葬の原義）、風化を待った。後に、殯葬（ひんそう）という形式がとられ、板屋（ばんや）に隔離し、安置し、風化した骨をとって葬った。その風化した骨に人が踞（ひざまづ）く象が屍。金文では死は司、治の義に用いられ、尸を死（つかさどる）という風に用いられ、詩や書に至り生死の意味に用いられたとある（字統）。
三年の喪というくらいで、一般人ならともかく、君子がとりおこなう葬儀は禮を竭すべきもので鄭重におこなわれねばならない。遠（とおい）の袁は、死喪のとき襟もとに玉をおき、枕辺に止（はきもの）を加えて死者を送る形。遠とは死者の遠行が原義（字統）。後に遙かの義に用いられ、ここでは始祖のこと。追（おう）は軍事的に敵を追うことが原義であるが、後に時間的に遡ることにも用いられ、ここでは始祖の祭祀を怠らず、追憶すること。
厚とは厂（廟屋）に碯碿罾㫗（こう：鬯酒<ちょうしゅ：黒黍で醸した酒>）を奉じる象で、廟中に厚く亨饌（きょうせん）する義（字統）。賢賢易色、民もこれを真似、父母の終を愼しみ、先祖を追うなら、民の徳も厚くなる。

終はりを愼むは、喪に其の禮を盡くす、遠きを追ふは、祭に其の誠を盡くす、民の德厚きに歸すは、下民之に化し、其の德も亦厚きに歸するを謂ふ。蓋し終は、人の忽し易き所なり。而して能く之を謹む。遠きは、人の忘れ易き所なり。而して能く之を追ふ。厚きの道なり。故に此を以て自ら爲すは、則ち己の德厚く、下民之に化すれば、則ち其の德も亦厚きに歸す。

10）子禽問於子貢曰夫子至於是邦也必聞其政求之與抑與之與子貢曰夫子温良恭儉讓以得之夫子之求之也其諸異乎人之求之與
zǐ qín wèn yú zǐ gòng yuē fū zǐ zhì yú shì bāng yě bì wén qí zhèng qiú zhī yú yì yǔ zhī yú zǐ gòng yuē fū zǐ wēn liáng gōng jiǎn ràng yǐ dé zhī fū zǐ zhī qiú zhī yě qí zhū yì hū rén zhī qiú zhī yú
子禽、子貢に問ひて曰く、夫子の是の邦に至るや、必ず其の政を聞けり。之を求むるか、抑も之を與（あた）ふるか。子貢が曰く、夫子温良恭儉讓（おんりょうきょうけんじょう）以て之を得たり。夫子の之を求むるや其れ諸れ人の之を求むるに異るか。

子禽は孔子より40歳少く、姓は陳、名は亢。是書都看過了は、本という本はすべて読んだ（中日大辞典）、至於是邦は、至るやどの邦においてもの義。聞奏は天子に申し上げること、聞政は政治について聞くことであるが、申し上げることも含まれよう。與は yú で疑問や反問の助詞、yǔ 文語で、諸侯が礼をもって親しく交わること（中日大辞典）。抑（そもそもと訓ぜられる）は、それとも～か？の義。孔子が求めたのか、それとも與（あづか）ったのか。
子貢は孔子より31歳少く、姓は端木、名は賜。子禽の兄弟子とされる。温（おだやか）良（すなお）恭（うやうやしい）儉（つつましやか）讓（ひかえめ）。求之とは諸侯と政治について語り合うこと。さような性格であれば、普通なら、下克上の戦国時代の諸侯がどうして意見を求めようか？弁舌と貨殖の才をもって諸侯の評判を得た子貢からみれば、夫子（孔子）は尋常ではなかった。そこを子禽に伝えておきたかった。

之與の與は平聲yú。下も同じ。○子禽は、姓は陳、名は亢。子貢は、姓は端木、名は賜。皆孔子の弟子。或ひと曰く、亢は子貢の弟子、と。未だ孰か是なるを知らず。抑は反語の辭。
溫は和厚なり。良は易直なり。恭は莊敬なり。儉は節制なり。讓は謙遜なり。五つの者、夫子の盛德光輝、人に接する者なり。其諸は語の辭なり。人は他人なり。言ふは、夫子未だ嘗て之を求めず、但其の德容是の如し。故に時の君敬信して、自ら其の政を以て就きて之を問うのみ。他人の必ず之を求めて後得るが若きに非ざるなり。聖人の過化存神の妙、未だ窺ひ測り易からざる。然れども此に卽いて觀れば、則ち其の德盛んに禮恭しくして、外を願はざるも亦見る可し。學者の當に心を僭めて勉め學ぶ所のものなり。○謝氏の曰く、學者、聖人の威儀の閒を觀れば、亦以て德に進む可し。子貢の若きも亦善く聖人を觀ると謂う可し。亦善く德行を言うと謂う可し。今聖人を去ること千五百年、此の五つの者を以て其の形容を想い見れば、尙能く人をして興起せしむ。而して況や之に親炙する者に於てや、と。張敬夫曰く、夫子の是の邦に至るや、必ず其の政を聞く。而して未だ能く國を委ねて之に授くるに政を以てする者有らず。蓋し聖人の儀刑を見て、之に告ぐるを樂しむは、彝［い］を秉［と］り德を好むの良心なり。而して私欲之を害す。是を以て終に用いること能わざるのみ、と。

11）子曰父在觀其志父沒觀其行三年無改於父之道可謂孝矣
zǐ yuē fù zài guān qí zhì fù mò guān qí xíng sān nián wú gǎi yú fù zhī dào kě wèi xiào yǐ
子の曰はく、父在せば其の志を觀、父沒せば其の行を觀る。三年、父の道を改むるなきを孝と謂ふべし。

在（います）は、生きているの義。沒（ぼつ）は水中に沒すること、一生を終えるを没身、没世という（字統）。君子のありかたを述べた愼終追遠を家族におきかえた。その子が孝であるかをどう判断するかといえば、父の死後、その子が父の道を三年改めぬかどうかをみればわかる。觀（みる）は隹（とり）形が含まれ、鳥占いの方法による農耕儀礼からきており、觀るという行為には、呪的にその対象を支配するという意味が含まれている（字統）。父在命のおりは行動にはあらわれにくいが、その志を觀ておけば、わかる。人はそのように觀られているものだ、こころしておきなさい、となろうか。ところが、孔子なきあと、孔子に容貌の似た俊才有若を師にして仕えた。これが師の道を三年改めずとなろうや？

12）有子曰禮之用和爲貴先王之道斯爲美小大由之有所不行知和而和不以禮節之亦不可行也
yǒu zǐ yuē lǐ zhī yòng hé wèi guì xiān wáng zhī dào sī wèi měi xiǎo dà yóu zhī yǒu suǒ bù xíng zhī hé ér hé bù yǐ lǐ jié zhī yì bù kě xíng yě
有子が曰く、禮の用、和を貴しと爲す。先王の道、斯を美と爲す。小大之に由るも行はれざる所有り。和を知りて和すも禮を以てこれを節せずば、また、行なはれべからざるなり。

有子は秀才であり、難解。君子務本、孝弟(也者其)爲仁之本、先に、物事の本（もと）について述べた。しかし、本だけでは実践されるものではなく、用というものが必要、となろうか？有子流である。孔子という“本”を有子という“用”をもちいる、ということで師の立場に就いたものでもあるまい。和を貴（とうと）しと爲す、とは聖徳太子の言でもある。和なくしては物事が行われないことをたたきこまれてきた日本人には、なんとなくわかる。中国や米国では、本の力を信奉し、和は脇役である。
仁の本は孝弟。孝弟が実践されるには、禮に則（のっと）られねばならぬ。禮が行はれるには和が用いられねばならぬ。和を貴と爲す。それが、美（よし）、事の軽重を判断する基準でもあるが、和せば実践されるかといえば、そうともかぎらない。禮によって和も調節されねば行はれない、とでもなろうか？有子は、孔子とは異なり、誰にも通用する論理を考えようとする人である。

13）有子曰信近於義言可復也恭近於禮遠恥辱也因不失其親亦可宗也
yǒu zǐ yuē xìn jìn yú yì yán kě fù yě gōng jìn yú lǐ yuǎn chǐ rǔ yě yīn bù shī qí qīn yì kě zōng yě
有子が曰く、信、義に近づけば、言復むべし。恭、禮に近づけば、恥辱に遠ざかる。因りて其の親を失はざれば、また宗とすべし。

信とは言と行が一致することで生まれる。しかし、悪しき言と悪しき行が一致する信では、信が損なはれる。復（かえる）は、すべてもとの状態に回復すること、死者の霊を呼び戻すことを復という（字統）、“ふむ：地に足をつける、地霊を鎮める儀礼（平凡社字訓、以下字訓）”と訓じさせている。言とは心に思うことを口に出すもので、思い（言霊）がこめられたものである。義に近き言なら可復、実現されてよい。恭とは両手でものを奉じる形、うやうやしくすること。うやうやしくとも、卑しければ如何ともし難い。禮にもとづかねば恭が損なわれる。因から先は論理が筆者には不明。因（よ）るとは人がものに身をまかせているさま、ものをたよりにすること（漢和中辞典）。其親とは何か？親は立木と見からなり、立木は辛（はり）をうってえらんだ木で、これを切るのが新、これで神位を作って祭るものは親。神位を拝するを親といい、のち、自親（みずから）・親属の意となる（字統）。可宗、宗は動詞であり天下宗之のごとく、向かう、帰趨すること（中日大辞典）。人の世話になっても、自親を失わなければとなろうか？孔子は諸国の諸侯や宰相、弟子の身内に身を寄せたが、不失其親、学宗となられた、とでも解してみたいが・・・？因は、だから～、其親とは、信近於義と恭近於禮、これに親しむことを失は（油断してしくじら）ねば、ということか・・・？

14）子曰君子食無求飽居無求安敏於事而愼於言就有道而正焉可謂好學也已
zǐ yuē jūn zǐ shí wú qiú bǎo jū wú qiú ān mǐn yú shì ér shèn yú yán jiù yǒu dào ér zhèng yān kě wèi hào xué yě yǐ
子の曰はく、君子、食、飽くを求むるなく、居、安しを求むるなし。事に敏にして言に愼み、有道に就きて正さむ。學を好むと謂うべきのみ。

飽（あく）の、包には盁満（えいまん）の意（字統）があり酒食で満たされること。居（きょ）は住居のこと。安（やすし）は、安楽なこと。敏於事とは、すばやく行動すること。愼於言とは、よく考えてから発言すること。有道は徳行のあること、就師（＝投師）は弟子入りすること、就正は他人に教えを請う、叱正を請う義（中日大辞典）。就有道而正とは、徳行ある人についてみずからの言行を正すこと。さようなくりかえしでこそ、學を好むといえるのみ。

15）子貢曰貧而無諂富而無驕何如子曰可也未若貧而樂富而好禮者也子貢曰詩云如切如磋如琢如磨其斯之謂與子曰賜也始可與言詩已矣告諸往而知來者
zǐ gòng yuē pín ér wú chǎn fù ér wú jiāo hé rú zǐ yuē kě yě wèi ruò pín ér lè fù ér hào lǐ zhě yě zǐ gòng yuē shī yún rú qiē rú cuō rú zhuó rú mó qí sī zhī wèi yú zǐ yuē cì yě shǐ kě yǔ yán shī yǐ yǐ gào zhū wǎng ér zhī lái zhě
子貢が曰く、貧しくして諂ふなく、富みて驕るなし。何如。子の曰はく、可なり。未だ、貧しくして樂しみ、富みて禮を好む者に若かざるなり。子貢が曰く、詩に云ふ、切すが如く、磋すが如く、琢すが如く、磨すが如し。其れ斯の謂ひか。子の曰はく、賜や始めて與に詩を言ふべきのみ。諸に往を告げて來を知る者。

諂（へつらう）は、説文に、諛（こ）ぶるなり、孟子の滕文公篇に、「肩を脅（あ）げて諂笑（てんせう：へつらいわらい）するは、夏畦（かけい：夏の畑仕事）よりも病（つか）る」とある（字統）。貧しくなくとも、諂ってでも位にありつく。富而無驕はまだしも、貧而無諂は言うは易く、行うは難い。ところで、およそ貧とは縁なく富める子貢が貧而無諂富而無驕とは、へりくだったような自慢のような問いである。
孔子は瞬時に切り返していた。貧しくとも樂しむ、富みて禮を好む。子貢よ、更に上はあるものだと。
間髪いれずに、子貢も詩で返した。切（せつ）は骨を切る、磋（さ）は象骨をみがくとされるが砥石にかけること、琢（たく）は玉をうちたたくこと、磨（ま）は石にこすること（字統）。骨を切りみがく、玉石をたたきみがく、たえず自らをみがいてゆくこと。賜は子貢のこと。其斯之謂與、それはこういうことですか？
子貢が詩の句で返したことが孔子を喜ばせた。可與言の與は yǔ で、共に語ることができる義。日本だじゃれ風にいえば、往（おう）といえば、來（らい）と返す、前に言ったことから次に来るものを知る者が子貢である。以政第二における顔回の対応は対照的である。

16）子曰不患人之不己知患不知人也
zǐ yuē bú huàn rén zhī bù jǐ zhī huàn bù zhī rén yě
子の曰はく、人の己を知らざるを患へざる。人を知らざるを患ふなり。

人不知而不慍の結びとして配されている。患（うれえる）、説文に、憂ふるなり。憂は yōu 、喪中にあって愁える人の形に心を加えた形、喪に服する憂愁が原義。貧であることは患であるが、貧と思われることが、更に、患である、という。患は、貝を貫いて綴る形で、そのとき宝貝をそこなうおそれがあることを、心情の上に移して患という（字統）。心配すること。孔子は、人が自分をわかってくれないことを嘆き、天のみわかってくれるといいきかせてきたが、晩年には、天も我をほろぼせり、と愕然ともされた。また、自分は人を見る眼があると信じてもおられたであろうが、ある時に、自分がいかほどに人のことを知っているか、はっと気づかれたことがあるのだろう。

学而第一　了　2006.09.24

ｂo　ｐo　ｍo　ｆo　唇

ｄe　ｔe　ｎe　ｌe　舌、上歯、破裂

ｇe　ｋe　ｈe　　　　喉

ｚi　ｃi　ｓi　　　　舌、摩擦

ｊi　ｑi　ｘi　　　　舌、下歯

zhi　chi　shi　ｒi　　捲舌

無気　有気

濁　　清

四声　1￣　2／　3Ｖ　4＼